

出家するということ

鷲尾 龍華

てくださったのだそうだ。

母は私が生まれる前、寂聴塾に通っていた。父と母との縁も寂聴さんがつないでくださったという。言うまでもないが、父と母が出会わない限り私は生まれなかつたはずなので、私が今生きていることは、寂聴さんなしにはありえないことだつた。そんな大きな存在であつたにもかかわらず、私は生涯で数回、しかもほんの少しの間しかお目にかかりなかつた。それが残念で、今でも時々、ちゃんとお話を伺いたかつたなあと思いだしている。

先生と私には、あるひとつ共通点がある。女性に生まれ、人生において出家したということだ。宗派は異なるが、後も、私が肺炎にかかつたときにはお見舞いにお花を贈つ

瀬戸内晴美という名前だった頃の寂聴先生を私は知らない。私の生まれた時には、既に出家をされていた。綺麗な紫のお衣をお召しになつてゐる、こぢんまりとしているが、ら溌剌とした笑顔の、テレビで見る有名人でおられた。あらドキュメンタリー番組で先生の半生が取り上げられていました。家族を残して出奔されたという先生が、ずっと後に娘さんに会いに行って話しかけたとき、「お母さんは死んじやつた」と言われる、というシーンに衝撃を受けた。

寂聴先生とは何度かお会いしたことがある。一度目は私

が生まれて間もない頃だ。そのとき撮つた、母と寂聴先生と赤ん坊の私が一緒に写つた写真を見たことがある。その後も、私が肺炎にかかつたときにはお見舞いにお花を贈つ

人が出家するとは一体どういうことだろう、と寂聴先生の文章を読んでふと考えたことがある。

「出家とは、生きながらに死ぬこと」と、先生はご著書のなかで仰っていた。世間から見た出家のイメージは、そういうものなのかもしれない。私は出家者だが、私にとつて出家とは「生きながらに死ぬ」ことから大きくかけはなれていた。

私は近江の石山寺に、一人娘として生まれた。そして、幸いにも幼い頃に仏教に興味を持つた。神仏の存在が身近であり、いつも自分たちを見守ってくれることが嬉しく感じられたからだ。僧侶になりたい、というよりかは、神仏と同じ世界で生きていきたいと心から願っていた。

私は小さな頃気管支が弱く、常に咳をしており、内向的で家族以外の人間のことを恐ろしい生き物だと思つていた。今思えば、石山寺という大寺院に生まれたことの重圧を感じており、しつかりしなくてはだとか、お寺にふさわしい子でいなければ、という思いに押しつぶされそうで怯えていたのだろうと思う。

そして、その苦しみを糧に、私は神仏の世界へ一途に向かつていったよう思う。

お釈迦様の時代、出家とは生まれた家のカーストを捨てて修行の道に入るということだった。釈迦、つまりゴータマ・シッダールタはインドの王子であつたが、夜中に城を出て家族を捨て、苦行林に入つていく。文字通りの「出家」である。

出家というのは、何か大事なものと引き換えにしなければならないことなのかもしれない。大切なものを捨てるかわりに、魂の安息を得ることなのかもしれない。

『源氏物語』に於いても、出家は女性の救済として描かれる。その当時の出家は世間體の悪いことで、女君たちが長く美しい髪を短く、尼削ぎにして、墨染めや青鈍色の衣を着ている様子を、光源氏は残念そうに見ている。女君たちは世間の一切のことを捨てて、出家することで生きながら死に、ある種の安樂を得たのである。

私にとつて出家することは、と考える。それはむしろ世間から喜ばれることであった。兄弟のない私がお寺を継いでいくことは両親にとつて喜びだつただろう。女だからだめだと言われることは一度も無かつた。何も捨てることがなく、むしろ敷かれているレールに乗つたような心地だつた。私は今でも剃髪していない。なぜ剃髪しなかつたかといふ

と、する必要がなかつたからだ。道場によつては、修行する際は女性も髪を剃るよう指導するところもある。ただ今日では多くの道場が、女性の修行者を有髪のまま受け入れている。

それ以上に、師僧である父から、絶対に剃髪しないように言われていたこともある。仏道に入ることを真剣に考え、剃髪しようかと思うと父に告げた時に言われたのだつた。

私は少し不満に思つたが、言いつけがあるのでそれを守つた。有髪であることで、あいつはやる気がない、と思われることもあるが、見てくれるために剃髪することこそ違うと思うので、未だに髪を伸ばしている。

多くの日本の寺院で、お寺に生まれた人には、本当の意味での出家が、もうできないのかもしれないと思う。出家することで、しがらみの中で生きていくことが決定してしまう。それはもしかすると、何も捨てることができない、「生きながらに死ぬ」ことができない状況なのではないか。そうすると自分には逃げ場所はなく、安楽もなく、救いはないのかもしれない、と深い闇に飲み込まれていきそうだつた。何年かはそのことに悩み、鬱々として過ごしていたようと思う。

ただ、その考え方のなかで変わりつつある。

私も例に漏れず、十四歳で出家してから、あらゆるしながらに翻弄された。それは不本意なことであつた。ただ、出家しなければよかつたとか、仏の道に入らなければよかつたと思ったことは一度も無かつた。

それは、苦しみのさなかにいるときに、自分の中心にあつたのが神仏であつたからだ。

寂聴先生にとつての出家は、生きながら死ぬという大きな意味を持つていた。ただ、まったく別の人に変容したのではなく、先生のそれまで描かれてきた人の苦しみや煩惱はそのまま救いとなつていくよう感じた。

生きていく上での苦しみ、人間のあいだで起つる摩擦など、そういうものもひつくるめて仏にあづけることができるのが出家者なのだと、今は思う。

先生は、言葉を用いて多くの人をその世界に導いてくださつたのだと思う。

出過ぎたことを書き連ねたことに若干の後悔はあるが、これからも先生の背中を追わせていただきたいと思う。安らかにお休みになられますように、菩提を日々祈ります。